

計画1-3

北アルプス南部のニホンザル個体群の
保護管理についての基礎的研究
泉山茂之（野生動物保護管理事務所）

調査地域とした安曇村周辺では、最低6群のニホンザル自然群を確認している。この地域においては、上部の分布限界となる梓川源流の上高地（河床標高1510m、温量指数44）には年間を通じて亜高山帯より上部において生活を完結する「明神の群れ」が棲息し、下部の分布限界は松本平（620m）との接点では果樹園・シイタケなどに加害している群れも棲息している。このようにこの地域の特徴としては、狭い範囲の植物の垂直分布帯の中に様々な群れが凝縮されて棲息していることが挙げられる。

1989年より、最源流に棲息する「明神の群れ」についてはラジオテレメトリー法による継続した追跡調査を実施してきたが、他の群れについては聞き取り、実地踏査、断片的な直接観察情報収集により資料を蓄積してきた。この地域の個体群の変遷を、調査を開始した1983年当時と比較すると、分布域は復元・拡大し猿害も拡大していった。1983年当時分布が認められなかった稻核地区の梓川右岸においては、1980年代後半に群れが確認されるようになり、現在では完全に定着したが、古老の話では明治前期までこの地域には群れが棲息していたということであった。また、これまで

猿害が発生していなかった大野川地区にも群れが出現するようになり、猿害は全村に広がった。

安曇村は、かつて養蚕が基幹産業であり、急峻な周囲の山々の1300m付近までがクワ畑であった。その実状は、明治末期、昭和8年の地図・写真から読みとることができる。現在、クワ畑はほぼすべて山林へと代わり、果樹などの換金作物もほとんどなく、人々がサルを追い払う意欲はあまり感じられない。養蚕の盛んな時代には山林の奥まで人手が入っていたものの、現在は集落周辺の二次林がサルの棲息地のコアとなっている。

このため、猟友会の協力を取り付け、常駐者のいる地区を中心にテレメーターを使用した追い払いの実施を計画し、個体の捕獲を試みた。しかし、個体の捕獲には成功していない。これはここ数年間、銃による威嚇を実施してきたことにより、サルが人間を避けるようになったことが原因と考えられた。